

艇言

報知新聞

藤原邦充

下関チャレンジカップ最終日の記者席でこの原稿を書いている。忙しい。とにかく忙しい。書きたいことは色々あるのだが、1ページを埋めるには量が足りない。というわけで、今回は小ネタ集としてお送りします。

ペラの費用は施行者が負担すべきだ

現在、ペラの費用は選手会が負担している。1枚約3万円。全国24場で毎年交換することを考えればかなりの費用だ。さらにペラが壊れた場合の新ペラも用意しておかなければならない。選手会が負担することになった経緯はこうだ。2012年4月、それまでの持ちペラ制度（選手がペラを3枚所有し、レース場に持ち込んで使用する。レースが終われば外して持ち帰り、また次のレース場で使用。レース毎にペラを交換することもあった）から、現在の備え付けペラへ制度が変わった。これは選手会からの要望が強かった。持ちペラ制度の時代は、レースがない日でも、自宅近くのペラ小屋で、

ペラを叩き、準備しなければならぬ。備え付けペラ制度になって、選手の余暇は大幅に増えた。ワークライフバランスを考えても、記者はいいルール変更だったと思っている。

持ちペラ制度の時代、ペラは選手が買っていた。備え付けペラ制度も選手会からの要望でもあったため、ペラの費用は選手会が負担することとなった。当初、ペラは2年に1度であったが現在は1年に1回。選手会の負担は単純に倍増した。「選手の賞金も増えているからいいだろう」という声もあるだろう。しかし、舟券の売り上げはもつと増えている。12年の売り上げが約9167億円だったのに対して24年はチャレンジカップが終了した時点で2兆2191億円を超えている。同時期の前年比は105%で、売り上げの伸びは天井知らずだ。今なら、施行者にもペラの費用を負担できる余裕があるのではないか。

ペラも1節間に1回は交換可にしてはどうか

また、選手会にはペラを1年間で4回破損すると、30日間レースを休まなければいけないというルールがある。ペラを故意に破損（な）いとは思わが）して交換する選手が増えることを防ぐ規制だろう。だが、菅章哉の伸び型ペラや、石川真二の内寄りペラを引いた選手は、おおむね調整に苦労している。新ペラに交換できるのであれば変えたいであろう。逆に前節優勝ペラや、峰竜太のペラを引き当てた選手は交換など考えないだろう。「1節間に1回は交換可能」というルールを作れば、特殊なペラに悩まされる選手も減るのではないか。

また、伸び型のペラを駆使する高田ひかるや堀之内紀代子のような選手にとつても朗報となるはず。4回破損ルールによって、それまで3回破損させている選手は思いきってペラを叩けなくなる（次に破損させると30日間休まなければならなくなるため）。伸び

型を封印し、ノーマルな形で戦っている場合は、4回破損ルールに片足を突っ込んでいる場合が多い。ただ、「1節間に1回は交換可能」ルールが採用されれば、思い切って伸び型のペラに挑戦できるようになるはずだ。

チャレンジカップはSGの単独開催に戻すべきだ

下関のチャレンジカップ（CC）の売り上げは約155億円で、目標だった175億円を大幅に下回った。CCがGIIレイディスチャレンジカップ（LCC）と同時開催となつてから11年が経った。今やSGの賞金は上がり、52人が出場しても、優勝すれば誰もがグラプリ出場のベスト18入りが果たせる。LCCも、年末のベスト12争いは残り1枠だけということが多い。490万円のV賞金では優勝しても届かないという選手も多い。来年からは女子のプレミアムGIも増える。LCCを廃止して、CCを52人出場の形に戻した方が盛り上がるのではないか。

藤原邦充（ふじわら・くにみつ）
1974年生まれ 50歳

香川県観音寺市生まれ。近畿大学を卒業。就職浪人の末、98年に報知新聞入社。芸能社会、中央競馬、ボートレース（1年だけ）、一般スポーツ担当を経て05年から2度目のボートレース担当に。競輪担当になって観音寺競輪取材することが夢だったが、無念の廃止に。